

「熊本地震と女性たち」

平成28年4月に起こった熊本地震により、多くの尊い命が失われ、熊本城をはじめ、県内各地に甚大な被害がもたらされました。いまだに続く余震の中、少しずつですが着実に、復興に向けて動き出しています。

今回は、自ら被災しながらも、被災者支援活動に取り組む4組の方々にスポットを当て、話を伺いました。

東北から熊本へ、

「歌うママ防災士」が今だからこそ伝えたいこと



歌うママ防災士 柳原志保さん

宮城県出身。東日本大震災で被災し、4年前に熊本県和水町へ移住。2児のママとして家族を支える一方、防災士の資格を取るなどライフワークとして防災に取り組む。

歌うママ防災士

東日本大震災で被災し、4年前に妹が暮らす熊本県和水町へ子ども2人と移住。和水町地域おこし協力隊や荒尾・玉名地域結婚サポートセンターに勤務しながら、震災体験を教訓に防災士の資格を取り、災害への備えをテーマに講演するなど防災をライフワークにして発信しています。

「防災の固いイメージを払拭したい―女性だから、母親である自分だからこそ発信できることがある、またそういった方々にこそ防災について学んでもらいたいと思い、防災士に「ママ」とつけるようになりまし。また講演会で話したことを思い出してもらえるよう講演の最後に「花は咲く」をうたうので、肩書はいつしか「歌うママ防災士」となりました。

講演をしていく中で、これまでは自分の話に感動はしてくれるけれどもどこか他人事のようにとらえる人が多いように感じていました。今回の熊本地震は防災への意識を変えるきっかけになったのではないかと思います。

防災にこそ様々な視点を

東日本大震災の時は着の身着のまま避難したため、着替えの服や下着すら持ち出すことができませんでした。次第に支援物資も入ってきましたが、配るのが男性の場合、下着のサイズなど伝えにくかったことがあります。

「防災は男性」というイメージがあるかと思いますが、実際、防災士や地域の自主防災組織のメンバーも多くが男性です。しかし、それだと避難所運営などの際、考え方に偏りが出てしまい、女性にとって利

